

おそれ

アポロ十一号打上げを前にして、三飛行士は最後の記者会見に臨んだ。その状況はテレビではやく報道されたが、翌日の新聞にも詳しく出ていた。その中に、つぎのような問答が見える。

問 打上げを前に恐怖の感情はないか。(答えはしばらくなかったため質問者は続ける)
失語症になったかね?

アームストロング 恐怖というのは、予測できないもの、従って克服できないものに対する感情だと思う。だが、訓練によって準備はできているので、恐怖の感情はない。

答えはしばらくなかったというところに、私は心を引かれた。そしてこの沈黙の重みは、私にある種の安堵感を与えた。もし恐怖の感情など全くないなどと、三人の中のだれかが響きの声に
おそれ 応ずるがごとく答えたとしたら、救われない思いをいだいただろうとも思った。「打上げを前に
お 恐怖の感情はないか」とはおそろしい質問である。どきっとするような質問である。平素は何か

に紛れて忘れていた心の底の深淵に、ふと気づかされるような言葉であるからである。こう問いかけられた瞬間、三人は本来の人間に立ち返ったのである。したがって「失語症になったかね？」に促されて、アームストロング船長が、「おそらくしぶしぶ答えたと思われる発言は、一種のてれかくしとも見られる。それにしても、この答えの前半は、恐怖の定義としてたいへん正確である。このような簡にして要を得た答えが船長の口をついて出たのは、その前に沈黙の時間があつたからである。というよりも、三人を暫時沈黙におとし入れるほどの、厳粛な人間の自覚が先行していたからである。

しかし「恐怖というのは……」は、客観的認識に立つた発言である。おのが内なる深淵におびえている間に、このような言葉が出ようはずがない。しばしの沈黙はこのことを証明している。質問者の揶揄的な促しによって、しいてその深淵に蓋をして、再び巨大な「機械」の一部にみずからを帰属せしめたために、たといてれかくしにせよ、このような発言が可能となつたのである。

人智人力を超えたものに対する「おそれ」の感情を失つたところに、現代の頹廢の最大の原因がある、と唐木順三氏は指摘する。アポロ飛行士は月を征服した、と事もなげにいうのを、はやくも耳にするようになった。そういう人間のさかしらにかかわりなく、宇宙は無限であり、月は依然として美しい。

月夜つぐよよし河音かはとみや清けしいざここに行くも去ゆかぬも遊あそびて帰かへかむ（大伴四綱）

月光遍照のもと、さやかな河音に伴奏されて、高らかな歌声がきこえてくるような気がする。
万葉人のみやびの伝統が、そう簡単にこの国から喪われるとは思えない。

もうひと月すれば、仲秋の名月が仰がれるだろう。

（四四・一〇）